NJOYA, A. Ndam
1975 *Le Palais de Foumban*, Yaoundé, Edition Ndam et Raynier.
NJOYA, I. Mbouyu et. (MARTIN, P. Henri trad.)
1952 *Histoire et Coutumes des Bamum*, Mémoires de l'IFAN, Centre du Cameroun, Série Populations, n. 5.

PARÉ, Isaac
1964 'Un artiste camerounais peu connu: Ibrahim Njoya, *ABBIA*, N° 6, pp. 172–185.

TARDITS, Claude
1973 'Parenté et Pouvoir Politique chez les Bamoun, *l'Homme*, Vol. 13 N° 1–2, pp. 57–49.

TRIMINGHAM, J. S.
1959 *Islam in West Africa*, London, Oxford Univ. Press, Amen Haouse.

Dictionnaire des Villages du Département Bamoun, 1968 Yaoundé, ILCAM ed.
Géographie du Cameroun, 1976, Yaoundé, C.E.P.M.A.E. ed.

滝生礼一　1958『イスラーム』岩波書店
蒲田　稔　1973「祭」『宗教学辞典』東京大学出版会 pp. 684–689.
富川盛道　1971「アフリカ学術調査中間報告」『民族学研究』35–4.
宮家　準　1977「民俗宗教の象徴分析の方法」『講座宗教学』東京大学出版会，pp. 187–280.

'古代ウイグル語' におけるインド系源借用語彙の導入経路について

庄垣内正弘
(京都大学)

On the routes of the loan words of Indic origin in the Old Uigur language

SHŌGAITO, Masahiro
Kyōto University

There has not been any systematic study as to how the loan words of Indic origin got introduced into the Old Uigur language. In this paper I attempted to describe the differences between forms of Indic origin in Uigur documents and their counterparts in Sanskrit, to give a systematic description of the fact that the differences directly reflect the forms in the intermediary languages, although they can be supposed to have originally come from Indic languages other than Sanskrit.

For this purpose the following steps were taken. Firstly, I paid particular attention to the finals of the relevant forms. Although they show great differences from the Sanskrit counterparts (as basic forms for comparison), it was found that with a few exceptions the differences show a certain regularity with respect to the relation between the Uigur finals and the phonological characteristics of the Sanskrit finals, and between the Uigur finals and the meanings of these Uigur words. This regularity in turn can be shown to conform to the relation which Tocharian exhibits with the forms of Indic origin. It was also found that a small number of Uigur words of Indic origin which have not the 'canonical forms' have also deviant forms in Tocharian.

Secondly, except for the finals, there are also basic similarities with Tocharian forms. That is, forms which differ from their Sanskrit counterparts in Uigur are also found to show parallel differences from Sanskrit in Tocharian.

In both cases (word finals and non-finals), some Uigur forms do not accord with the Tocharian forms of the same word. They are variants due to the nature of the documents they appear in, and very few are incorporated into the Uigur language. These forms came through Sogdian or some other languages.

From the above procedure it was sufficiently demonstrated that the loan words of Indic origin came essentially through Tocharian. These loan words are later borrowed into Mongolian from Uigur directly, a fact which suggests

to us the possibility of reconstructing forms, unattested in Tocharian and Uigur from Mongolian forms; e.x. Mong. bandab (name of a mountain, Skt. pāṇḍava) <Uig. *pandap—*pantap<Toch. *pāṇḍap.

In concluding, I would like to point out that from the research on the loan words of Indic origin we can see that the Uigur Buddhism in its early period was closely connected with Tocharian Buddhism.

0. 序
1. 語末形式と仲介言語について
2. 音韻形態上の考察
3. 借用語彙の定着について
4. 結論

0. 序

大多数のウイグル語[1]文献はいわゆる翻訳仏典である。仏教用語は原典言語をウイグル語に意訳したウイグル語形式もみられるが[2]，普通は外国語から借用した形式を使用する。借用語には中国語，トカラ語，ソグド語，チベット語，蒙古語などを来源とするものもみられるが，インド来源の形式が圧倒的多数を占めているといえる。しかしこれはウイグル仏典の大部分がインド語原典から直接に翻訳されたことを意味するのではない。ウイグル仏典の多くはインド語からの直接の翻訳というよりはむしろ中国語，トカラ語，チベット語あるいはソグド語などを通した重訳であったと考えられる[3]。インド来源の借用語はそのように数種類の翻訳原典言語を通したにも拘わらず原則的には常に同一の形式で現われる。このことはこれらの形式がウイグルへの仏教伝播の初期の時代に導入され定着普及した形式であるという事実を意味するものである。ウイグル語研究者は久しくこれらのインド来源語彙がサンスクリットからの直接の借用形式であると考える傾向にあった。

しかし両言語間には，お互いの文字組織あるいは音韻構造の違いから当然生じるであろう形式上の相違に関して，予想できる一般的差異の範囲では説明不可能な大きな相違が対応語彙全体にわたって観察される。このことはウイグル内の借用形式が単純にサンスクリット形式を反映したものではなく，むしろサンスクリットに類似した別の言語形式から借用したのではないかという疑いを懐かせる。サンスクリット以外のインド系の言語としてはプラークリットあるいはプラークリットとサンスクリットの混淆言語である，いわゆる buddhist hybrid sanskrit を想定することができる。そして，このような言語内にウイグル形式と一致する形式を探り当てることももちろん可能である。だが上で述べたごとくウイグル語仏典の多くは重訳文であって，ウイグル語内に定着したインド来源の借用語も第3言語を仲介して導入された可能性は十分に考えられる。もしそうだとするならばウイグル形式にみられる変形は仲介言語形式の影響によるものと推定してよい。実際これまでにもサンスクリットからみて大きく変形した形式に関しては中国語，トカラ語，ソグド語，サ

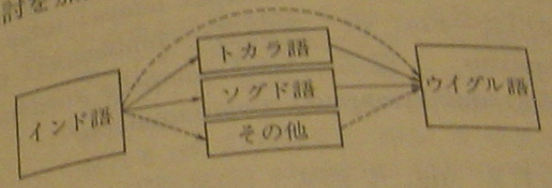
1) ここにいうウイグル語とは8世紀～14世紀のいわゆる‘古代ウイグル語’と呼ばれているチュルク語の1方言である。

2) atï kötrülmiš「世尊」kirtütin kälmiš「如来」ayaγqa tägimlig「尊者」tïldaγ basudučï「因縁」ozmaq qutrulmaq「解説」etc.

3) 重訳は，ソグド語以外は仏典の奥書から証明される。又，ソグド語あるいはソグド文化との接触を考えた場合にソグド語を通してウイグル語訳された仏典の存在も当然推定される。

語などの仲介が推定されてきた。又，特に‘Maitreyasamiti’のごときトカラ語からの翻訳文献が発見されて以来，それまではテクストから直接借用されたと考えられていた若干の単語がトカラ語を仲介したと考えられるようになった。しかしこのような仲介言語の決定は偶々サンスクリットより似ていると思われる形式が別の言語中に見出されたという個々の単語形式の相対的類似に頼ってなされたものであって，形式の類似性についての体系的説明がなされたことはなかった。

ここでは，ウイグル語内に定着したインド来源語彙が如何なる経路によって導入されたかを解明するために，先ず，このような語彙の全てがサンスクリット以外の何れかの仲介言語を経由して導入されたものと仮定した上で，仲介言語としては当時トゥルファン盆地に共存した数種類の言語が想定できるが，これまでに提供された情報の内で，若干の信頼できる特に特異形式の比較例から判断すれば，トカラ語とソグド語がその役割に対して最も積極的であったと推定できる。それ故ここでは一応この2言語が原則的にはインド来源語彙導入に際しての基本的仲介言語であったと仮定したい。そして以下にはこの2つの仮定に基づいて，ウイグル語内の全てのインド来源語彙の導入経路に関して総合的に検討を加えていきたい。



上で仮定した内容はこの図の実線の部分で示されているが，来源言語であるインド語とは別に，便宜的にサンスクリットを基本形としてこの図の外に設定したい。基本形の形式は今後各言語内の借用単語形式の変化の尺度となる。

なお，ウイグル文献内に現われる若干のインド来源借用語は本来仏教用語として導入されたものとここでは考えたい。

uig. ‘古代ウイグル語’　sog. 粟語
toch. トカラ語　chin. 中国語
sogd. ソグド語　skt. サカ語
b. sogd. 仏教ソグド語　tib. チベット語
m. sogd. マニ教ソグド語
skt. サンスクリット
ind. インド語（古代及び中期）
＊はゼロを表わす。

$A\begin{bmatrix}B\\C\end{bmatrix}\begin{bmatrix}D\\E\end{bmatrix}$ は $A\begin{matrix}B\\C\end{matrix}\!\!\diagup\!\!\diagdown\begin{matrix}D\\E\end{matrix}$ $\left(\begin{matrix}A-B\\A-C\end{matrix}\right.\left.\begin{matrix}B-D\\C-E\end{matrix}\right)$，$A\begin{bmatrix}B\\C\end{bmatrix}\begin{bmatrix}D\\E\end{bmatrix}$ は $A\begin{matrix}B\\C\end{matrix}\!\!\diagup\!\!\diagdown\begin{matrix}D\\E\end{matrix}$ の関係を表わす。

以下に掲げる uig. 形式の単語は参考文献1より引用した。

1. 語末形式と仲介言語について

1.0 uig. における ind. 来源の借用語彙を skt. と比較した場合に，両者間にみられる形式上の最も顕著な相違は語末形式にあるといえる。たとえば，skt. の語幹形式 anitya (f.) upagupta (m.) は uig. では常に anitï upagupti の形式で現われる。uig. のこの語末形式 -ï 及び -i は skt. の格語尾形式を映した形式とは考えられないし，又 uig. の音韻構造上からもこのような語末形式でなければならない必然性はない。

曽て Staël-Holstein は W. Radloff に仏典 "Tišastvustik" (Tiš) につ その中に現われるブラーフミー文字 式を伴った uig. 語彙について これらの単語が，人名を表示 skt. -a 語幹はウイグル文字で フミー文字で i e に，skt. の あるいは -i に，ブラーフミ

4) *upagupta*(m.) の格変化形には upagupte が現われるがこの形式は locative uig. に借用されたとは考えられない。

いは x 印に転写され，それ以外の意味を表示する単語は skt. の語末母音を表示しないという簡単な解説をなした[5]。

基本的である skt. からみた語末形式の変遷は単に上記仏典のみではなく広くウイグル文献全般にわたって確うることのできる現象であるにも拘わらずこの1910年に発表された仮説の意義はその後注目されることはなかった。

そして uig. 研究において skt. の対応単語の同定に際しては無視されるのが普通であった。

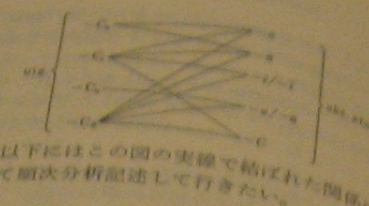
しかし，uig. の語末形式の変形が uig. と skt. の対応語彙間の言語学上の情報において何らかの規則性を見付け出すことができたなら，それは説明することが問題である現在，単語の意味が語末形式と関係するというこの意見は当然注目されるべきものであって，ここで吟味し直してみる価値は十分にある。

しかも仮りに語彙論上の意味情報によって語末形式の変形が整理され，その中に何らかの規則性を見付け出すことができたなら，その規則性は uig. skt. 以外の第3言語，即ち仲介言語の影響によって uig. 内にもたらされたものであるという可能性も十分に予想できる。

それ故ここでは先ず単語のもつ意味との関連性に注目しながらウイグル文献内の ind. 来源語彙の語末形式について考察してみたい。

1.1 ウイグル語における インド来源語彙の語末形式について

ind. 来源 uig. 語彙の語末形式は文献内で -Ca -Ci -Cu -C# の4種類の形式に分かれて現われる。一方これに対応する skt. は子音語幹の他に -a -ā -i -ī -u -ū の6種類の母音語幹がみられるが確認できる両者間の対応関係は次のごとく図示できる。



以下にはこの図の実線で結ばれた関係について順次分析記述して行きたい。

1.1.1 skt. -a 語幹と uig. の語末形式

1.1.1.1 uig. -# 形式

1° uig. 単語が普通名詞表現の場合には 1.1.2 1° に該当する単語を除いては規則的に -# 形式をとる；Skt. *abhiṣeka*: uig. abišik「灌頂」*akṣara*: akšar「文字」*kalpa*: kalp「劫」*nirvāṇa*: nirvan「涅槃」*maṇḍala*: mantal「曼荼羅」*mahāyāna*: maxayan「大乗」*paramārtha*: paramart「波羅末陀」*udumbara*: udumbar「優曇華」*lakṣaṇa*: lakšan「相」*kušalamūla*: kušalamul「善根」*adhipatiphala*: adipatipal「増上果」*saṅghārāma*: sagram「僧伽藍」*kṣaṇa*: kšan「利」etc[6]。

2° 固有名詞表現の場合には 1.1.1.2 1° に該当する単語を除いたものは規則的に -# 形式をとる；地名—*kaśmīra*: kašmir *magadha*: magat *pūrvadeśa*: purvadiš *rājagṛha*: raćakrq *vipula*: vipul *jetavana*: ćitavan *jambudvīpa*: ćambudvip *mahācīnadeśa*: maxaćinadiš 山名—*kukkuṭapāda*: kuktapat *udaya*: uday 河川名—*sīta*: sit 寺院名—*tāmasavana*: tamasavan 経名—*daśakarmaptha avadānamāla*: daśakrmapuda awtanamal etc[7]。

1.1.1.2 uig. -i 形式

1° uig. 単語が人，仏，菩薩などの人格名，鬼神，天神などの神格名を表わす固有名詞表

5) *Tiš* pp. 116–119.

6) この類に属する単語は他にも多数掲げることができるが，ここでは省略する。

7) この類に属する単語としてここでは更に天界名称を補足しておきたい；skt *parittàbha*: uig. paritab「少光天」*ābhāsvara*: abasvar「光音天」*apramānābha*: apramanab「無量光天」*apramānasubha*: apramanašub「無量浄天」*tusita*: tužit「兜卒天」。

後の場合には規則的に -i 形式をとる；人名—*caitana*: ćitani *jayasena*: cayesini *puṣka*: ćiwki *dhanūpāla*: danupali *kalmāṣapāda*: kahašapati *kumāra*: kumari *sutasoma*: sutasomi *anāthapiṇḍika*: anatopindaki *nāgārjuna*: nagartuni *vināyaka*: vinayaki 仏名—*rnaśādhvaja*: maxadivati *prabhaṃkara*: prabagkari *ratnapuṣpa*: ratnapuški *samantaprabhā*: samantaprabi 菩薩名—*tārūḍala*: tarduli *caramabhavika*: ćaramabaviki *kāṃcanakuśi* 神格名—*urumukha*: makoja: *kaṃcanakuśi* 神格名—*urumukha*: *subumi pañcika*: pančiki *agnikeśa*: agnikiši *maheśvara*: makišvari *mahādeva*: maxadivi etc[8]。

2° 普通名詞として現われる語彙中，人格の身分，所属を表示する単語の数は少ないが，このような単語は一般に -i 形式をとる；*yogaćāra*: yogaćari「瑜伽師」*sārthavāha*: sartavaki「商主」*purohita*: puroxiti「近臣」*parivrājaka*: parivaraćaki「普行」*saṅghasthavira*: sagistvri「僧院の長老」*nirgrantha*: nigranti「尼乾子」etc.[9]

3° 普通名詞の内，鬼神の類名は一般に -i 形式をとる；*kiṃnara*: kinari「緊那羅」*ghandharva*: gandarvi「乾闥婆」*asura*: asuri「阿修羅」*mahoraga*: maxuragi「摩睺羅加」*yakṣa*: yakši～yakäš「夜叉」*bhūta*: buti「部多」*pūtana*: putani「布怛那」*kaṭapūtana*: kapūtana: putani「布怛那」*kaṭapūtana*: kabutani「鳩槃荼」*piśāca*: pišti「毘舎闍」*kumbhāṇḍa*: kumbandi「鳩槃」etc.

4° 動物名を表示する普通名詞も一般に -i 形式をとるという；*preta*: prit「餓鬼」*rakṣas*: rakšas「羅刹」*kiṃnara*: kinari「緊那羅」*nāga*: nagi「龍」(CVIII) *kañjara*: kandari「象」*khaḍga*: kadgi「犀」*kalaṅka*: kalvanki「夜叉」*garuḍa*: garudi「金翅鳥」[10]。

Skt. -a 語幹に対応する uig. 形式はこれらの他に -a 形式もみられるが，この形式は特殊として取り扱うことができる (cf. 1.4.1.6)。

1.1.2 Skt. -ā 語幹と uig. の語末形式

1.1.2.1 uig. -# 形式

1° uig. が普通名詞表現の場合には 1.1.1.1 1° と同様に規則的に -# 形式をとる；*pāramitā*: paramit「波羅蜜」*sīmā*: sim「境界」*anityatā*: anityat「無常」*āśleṣā*: aslešä「柳」*maghāmak*「星」*lalanā*: lalan「左神経」etc.

2° uig. が 1.1.2.2 を除く固有名詞表現の場合には 1.1.1.1.2° と同様に規則的に -# 形式をとる；地名—*mithilā*: mitil *abhāvapurā*: abavapur 河川名—*gaṅgā*: gaŋ 星座名—*vajracchedikā*: vaćaćitak *padmālaṃkārā*: padmalanjkar (cf. BM 2 pp. 021–022) etc.

8) この類の単語は他にも多い。なお，uig. では skt. の語末が -y-a の場合には単語の意味に関係なくこの音連続は単に文字 y で表記されるのでここでは扱わなかったが，これは uig. の語末が全て /-y/ あるいは /-i/ に中和されたことを意味するのではなく，このような文字 y は子音の後では /-i/ 又は /-yi/ を，母音の後では /-y/ 又は /-yi/ の音素を表示していたものと考えられる (cf. 2.112.3°)。即ち -# 形式と -i 形式は音韻レベルでは区別されていた；*ātaya*: ašay/ašay/「阿世耶」*akṣobhya*: akšoby/akšubyi/(仏名)。

9) 人格界の階層階級を表わす次のような名称には -i 形式は付かない；*pratyekabuddha*: pratikabut「独覚」*śrāvaka*:širavak「声門」*prthagjana*: partakćan「凡夫」*caṇḍāla*: candal「旃荼羅」*brāhmana*: braman「バラモン」。一方，小乗経内の部派名が -i 形式で現われるのは，「……に所属する者」の意味で用いられていたためであろう (cf. 1.1.4 1°)；*mahāsaṃghika*: maxasaŋiki「大衆」*stha-viraka*: istaviriki「上座」*haimavata*: xaimavati「雪山」*ekavyāvahārika*: ikavyavaxariki「一説」*kaukkuṭika*: kokutiki「鶏胤」*caitika*: ćaitiki「制多山」*uttaraśailaka*: utiraišailiki「北山住」*mahīśāsaka*: mrkišasaki「化地」etc. (BM₂ pp. 030–032).

10) 動物名称は鬼神類名と重なることがある。鬼神八部衆名中の *mahoraga* (cf. 3°) は「蟒」の意味であり，この *garuḍa* もその中に加えられる。